

太平天国の北伐前期をめぐる諸問題 —南京から懷慶まで—

菊池 秀明 *

I. はじめに

太平天国運動（1850年～64年）が中国近代史に与えた衝撃の大きさについて否定する人はいないであろう。むろん現在は中華人民共和国の成立を起点として、中国共産党が勝利した必然性を跡づけようとしたかつての革命史観のように、太平天国を「中国革命の先駆者」として過大に賞賛する研究は存在しない。むしろ近年は改革・開放政策の恩恵を受けた沿海都市の知識人が、経済的に立ち遅れた農村の貧困さを蔑んだり、現政権にとっての脅威である法輪功との類似点ゆえに、辺境の農村で生まれた民間宗教を母胎とする太平天国を「邪教」⁽¹⁾に煽動された破壊的な運動と見なす傾向が強く見られる。

これら時代の要請に基づく政治主義的な見方を除くと、太平天国の実像がいかなるもので、その後世への影響をどのように考えるべきかという問いは必ずしも発せられてこなかった。だが辛亥革命や1920～30年代の政治過程に関する研究成果⁽²⁾が次々と生まれている現在、これに溯る19世紀の中国政治・社会史研究が空白が続けることは許されない。中国近代史像を客観的に再構成するためにこそ、その最初の大変動であった太平天国を正確に把握する必要性が増していると言えよう。

本稿は以上のような問題意識に基づき、太平天国史上の重要事件である「北伐」即ち北京攻略（1853年5月～55年5月）を、新たに公刊された文献史料に基づいて出来る限り詳細に描くことを目的とする。辛亥革命の指導者である孫文はこの太平天国の北上作戦に強い刺激を受け、その生涯においてくり返し北京進攻を試みた。また彼の後継者を自任した蒋介石も北伐を至上命題にかかげ、⁽³⁾中国国民党を中心とする歴史観では長く国民革命軍の北京到達（1928年6月）を中国近代史の終着点と見なし てきた。

* 社会科学科準教授

いっぽう北伐の失敗が太平天国自身の挫折につながったという見解は、同時代人である忠王李秀成⁽⁴⁾ やリンドレー (A.F.Lindley)⁽⁵⁾ が提起し、孫文がこれに共鳴して以来広く受け入れられてきた。だがはたしてそれが妥当な見解なのか——この作戦の意義がどこにあり、その敗北が運動にいかなる影響を与えたかについても再考が必要であろう。

その後の中国近代史に深い影響を与えたこの事件については、郭廷以氏、⁽⁶⁾ 簡又文氏、⁽⁷⁾ 羅爾綱氏⁽⁸⁾ を初めとする中国人の太平天国史研究者が多くの著書・論文を発表している。⁽⁹⁾ また日本では堀田伊八郎氏が『欽定平定粵匪方略』などの基本文献を駆使した専論を発表しており、⁽¹⁰⁾ 地域社会史の視角から太平軍北伐期の天津団練を取りあげた吉澤誠一郎氏の論考もある。⁽¹¹⁾ 本稿はこれらの成果に学びながら、中国第一歴史檔案館所蔵の檔案史料(皇帝に提出された地方官の行政報告)を整理、編集した『清政府鎮圧太平天国檔案史料』、⁽¹²⁾ 長年太平軍北伐に関する史料を発掘してきた張守常氏の『太平軍北伐資料選編』⁽¹³⁾ などの新史料に基づいて分析を進める。むろんこれらの史料集も誤りが皆無ではなく、編纂の過程で一定のバイアスがかかることも予想される。そこで本稿では筆者が2001年に台湾故宮博物院で閲覧した『宮中檔咸豐朝奏摺』(未公刊)⁽¹⁴⁾ を補足史料として活用し、これらの史料集の信憑性を確認しながら議論を進めることにしたい。

Ⅱ. 北上作戦の開始とその戦略

1. 北伐軍の規模とその編制

すでに史料の発掘および先学諸氏の研究によって、1853年5月に南京(天京、金陵)を出発した太平軍の最終目標が北京攻略にあったこと、その編成は9ヶ軍から成り、当初2万人程度の規模であったことが明らかになっている。まずはこの定説が間違いないかどうかを検討することから始めたい。

北伐軍の主将であった天官副丞相林鳳祥(広西桂平県白沙人)⁽¹⁵⁾ は、作戦開始に当たって東王楊秀清に揚州から南京へ呼び戻され、地官正丞相李開芳、春官副丞相吉文元、殿前左三検点の朱錫琨(いずれも広西人)と「九軍」を率い、黄河の渡河をめざしたと述べている。⁽¹⁶⁾ この太平軍が以前の通説のように揚州からではなく、南京から出発したという事実は、兵士として北伐に参加した陳思伯⁽¹⁷⁾ や徐州で清軍にスパイとして捕らえられた曹宗保⁽¹⁸⁾ も指摘している。また北伐軍の編成がかつて言われた21ヶ軍ではなく、9ヶ軍であった点についても、陳思伯や亳州で太平軍に参加した張

維城が供述書で具体的な部隊名を列举しており、間違いないものと考えられる。⁽¹⁹⁾

次に北伐軍の人数についてだが、作戦が始まった当初、清朝官僚の多くはこの太平軍を数千人規模の小部隊と考えた。揚州戦線にいた欽差大臣琦善はその例で、「江寧（南京）、揚州で撃破された賊が江中を往来し、阻むことが出来ない」⁽²⁰⁾とあるように、揚子江上で活動する太平軍は南京や揚州で敗北した部隊だという認識を持っていた。また安徽巡撫李嘉端は「賊は揚州から竄出したことは疑いない」⁽²¹⁾と述べ、江蘇巡撫楊文定も六合県に上陸した後衛部隊を本隊と混同して「賊匪は三、四千名」⁽²²⁾と報じた。その結果北伐軍は揚州の清軍を牽制するために派遣された別働隊だとの見方が生まれた。

しかし5月11日に浦口に上陸した本隊は安徽の滁州を占領し、数日後には鳳陽県の臨淮関に進出した。⁽²³⁾ここで後衛部隊の到着を待った太平軍は、5月28日には鳳陽府城を占領した。⁽²⁴⁾この頃から清朝側も北伐軍に注目するようになった。太平軍の黄河渡河までに書かれた上奏文から、その兵数に関する記載を見ると次のようになる

(A) 該匪は約〔一〕万余りで、突如臨淮から蜂擁として来た【安徽鳳陽府】。⁽²⁵⁾

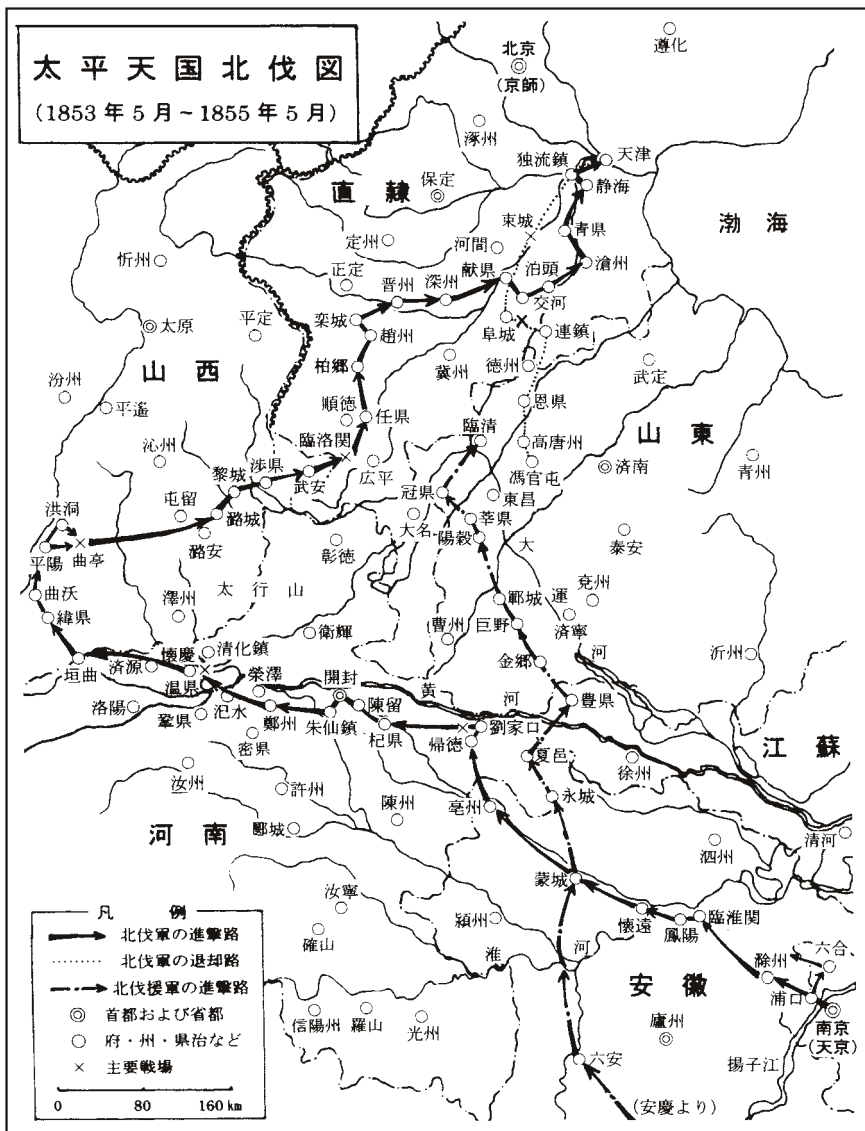
(B) 捕らえた長髪賊である楊宗傳……らの供述によると、正賊は千人に過ぎず、賊は一人で脅して従わせた民を二十五人率いる。真賊は少ないので、従った者は二万余人いるが、命令は実行されず、途中で逃げ出す者が極めて多い【安徽懷遠県】。⁽²⁶⁾

(C) この逆賊はもとより敗残の零匪で、先に聞くとくでは長髪の逆匪は僅かに一、二千、脅されて従った捻匪が二、三千で、数はそれほど多くないとのことだった……。現在は蔓延すること久しく、従う者も増えたため、報告によると賊は一万余人、賊船は三、四百隻おり、勢いは燎原の火のようである【河南蒙城県】。⁽²⁷⁾

(D) 逆賊が揚州より逃れ出て以来、担当の官吏はみな僅か一、二千人など心配するに及ばないと言って、滁州から鳳陽、懷遠、蒙城、亳州まで一人として矛を交えようとせず、いたずらに誤った情報を伝え合っ、みすみす事態を誤らせた。私（陸應穀）は歸徳で数千の兵で賊と戦うこと三日、賊匪の戦法は武器こそ優れていないが、数百人が一隊となり、身を伏せて前進し、退くことを知らないのを目撃した。また人数が余りに多く、往々にして後方から挟み撃ちにするので、官軍は見て恐れをなし、先を争って逃げ出してしまふ。その行軍はさして整っていないが……。途中決して殺人はしない。その亳州から汴梁（開封）へ至った者はおよそ見積もって数万に及ぶ【河南歸徳府】。⁽²⁸⁾

太平天国北伐図

(1853年5月～1855年5月)



(E) 連日生け捕った賊を取り調べたところ、その供述では揚州から逃れ出たのは千人に過ぎず、途中脅して従わせて汴梁に至ったのは約「一」万余人であり、二万人という者もある。ただし従ったり逃げたりで、現在残っているのは五、六千人であるが、至る所で数万あるいは一、二十万と唱えて人々を恐れさせている【河南開封府】。⁽²⁹⁾

これらの報告は(D)で河南巡撫陸應穀が敗戦の責任を逃れるべく、太平軍の兵力を数万人と過大に評価したのを除くと、残りはみな1万人から2万人という数字を挙げている。また(B)の兵部侍郎銜周天爵、(E)の代理河南布政使沈兆澧の報告は1000～2000人の小部隊という見方と辻褄を合わせるべく、途中多くの参加者を得て勢力を伸ばしたと解釈している。確かに林鳳祥らは河南朱仙鎮から北王昌昌輝へ送った戦況報告で「將兵は日々増加している」⁽³⁰⁾と述べているが、後述のように急速に軍勢が拡大したとは考えにくい。清朝官僚の報告にある1万ないし2万人は出発時の兵力をさすと見てよいだろう。

いっぽう太平軍の関係者はどのように述べているだろうか。北伐作戦の失敗後に捕らえられた李開芳は、「私は浦口から林鳳祥、吉汶沅(吉文元のこと——著者)と賊匪二、三万人を率い、黄河を越えて直隸へと入った」⁽³¹⁾と供述している。彼はまた「黄河を渡った時、広西の老賊は五、六百人に過ぎず、脅して従わせた者を含めて二万だった」と述べており、北伐軍内に金田挙兵以来のベテラン兵士が500～600人いたことがわかる。なお李開芳によると「新たに得た人は湖南、湖北〔人〕が最も多く、最も力がある。安徽〔人〕で力のある者は少ない」⁽³²⁾とあるように、残りの2万人も中心となったのは1852年に太平軍が湖南、湖北を進撃した時に参加した兵士たちだった。ここから北伐軍の兵力が2万人以上で、広西、湖南、湖北出身の精鋭が主力を構成していたことが窺われる。

次に張維城の供述を見ると、懷慶攻撃時の状況として「現在真の長髮賊は約二万おり、その新しく脅されて従った臨淮、鳳陽、蒙城、亳州、歸徳人も一万いる」と述べている。ここには渡河作戦の死者や渡河出来ないまま南下した兵数が入っていないが、南京以来の中核が2万人、その後の参加者が1万人という記載はかなり実数に近いと考えられる。ちなみに張維城も「戦闘の時はみな湖南、湖北、南京、広東、広西人を派遣し、新しく捕らえられた者は戦闘に参加させない」⁽³³⁾とあるように、主力はあくまで南京から派遣された將兵だったと指摘している。

さらに太平軍で文書作成を担当した陳思伯『復生録』は次のように述べている

林逆（林鳳祥）は南京から賊を率いること十一万、臨淮関に至り、新增の淮（安徽）の民で十七万に至った。途中また豫（河南）の民が増え、汴梁省で三万余りが逃げたが、なお賊は十六万いた。鞏県で「黄河を」渡河した時には、賊数はすでに二十万に増えていたが、溺死した者が万人、渡河を望まずに南京へ戻った者が約四、五万おり、林逆が渡河させたのは十三万余人に過ぎなかった。天津に到達して調べたところ、十万人に足りなかった。⁽³⁴⁾

ここで挙げた数字は先の内容と一見大きく食い違うが、陳善鈞『癸丑中州罹兵紀略』は太平軍のいう「一万人」が実質 2500 人だと述べている。⁽³⁵⁾ また曾立昌率いる援軍の兵士だった張大其は太平軍の「一軍」が 2500 名であると供述しており、⁽³⁶⁾ これに従えば南京出発時の兵数は 22500 人（9 ケ軍から換算）または 27500 人（11 万人から換算）、黄河渡河の段階で 5 万人、渡河に成功したのが 32500 人、天津に到達したのが 25000 人だったことになる。むろん六合県に上陸した一隊は敗北して南京に引き返しており、⁽³⁷⁾ 出発時の兵力全てが北伐に参加した訳ではない。これらの要素を考え合わせると、2 万人強という数字はまず妥当と考えられるのである。

ちなみに張維城の供述によると、太平軍の「一軍」はいつも一律に 2500 人だったのではなかった。彼は「前一、前二兩軍は人数が最も多く、度胸も一番あり、およそ一万余人いる。その他の七軍は、二万人に過ぎない」⁽³⁸⁾ と述べており、林鳳祥、李開芳の直属部隊だった前一軍、前二軍（もとは前軍主將西王蕭朝貴の部隊で、彼の死後は林鳳祥らが統率したと見られる）の人数が多く、戦闘力も高かったことがわかる。

『太平軍目』の規定によると、太平軍は参加者を出身地ごとにまとめながら、五旗制度のもとで組み合わせて編成することになっていた。⁽³⁹⁾ また新兵の補充は各部隊でなされたが、張維城が両司馬羅春や師帥黃錦文（広東人）の部下となり、陳思伯が右一軍旅帥鄭阿培の部下をつとめるなど、將校と兵士のパーソナルな関係が重要な意味を持った。⁽⁴⁰⁾ 無論南京占領後にそれまでの 25 ケ軍から「新掠の民を増やして、全部で五十軍となった」⁽⁴¹⁾ とあるように、軍の編成変えも行なわれた。また李開芳の部下でありながら、北伐に加わらなかった忠裨天將李尚揚（湖南安仁県人）のような事例も存在する。⁽⁴²⁾ だが戦闘による損失もあり、各軍で人数や戦闘力に差が出るのは避けられなかったであろう。

さらに安徽、河南の参加者にあって重要なのは、華南では養成が難しい騎兵であった。周天爵は太平軍が多く馬、ラバを奪って機動力を高めようとしていると報じて

おり⁽⁴³⁾、林鳳祥らも南京への報告で新兵に「馬、ラバに乗る者が大変多い」⁽⁴⁴⁾と記している。

2. 北伐軍の戦略と清朝の対応

さて北伐軍の攻撃目標はどこであったのだろうか。『清史稿』洪秀全伝にある「問道を行き、速やかに燕都（北京）へ赴け」という洪秀全の命令は、羅惇融『太平天国戦記』から引用したもので史料的な信憑性は高くない。⁽⁴⁵⁾ また逮捕後の李開芳は洪秀全が「天津に到達したら報告せよ。さすれば再び兵を送る」⁽⁴⁶⁾と指示したと述べるに止まり、目的地については明言を避けている。しかし楊秀清は林鳳祥らに後衛部隊を待たず前進するように指示した誥諭（1853年5月28日）の中で、連絡役をつとめた彭福興らに「北京に到達した日には、監軍の袍帽を与えよ」⁽⁴⁷⁾と命じている。また1853年9月末に直隸へ入った太平軍はしばしば兵士を北京へ潜伏させて内応を図っており、⁽⁴⁸⁾ここから太平軍が当初から北京攻略をめざしていたことは間違いないと考えられる。

いっぽう清朝側は北伐軍の兵力を低く見積もったこともあり、太平軍の意図をなかなか見抜けなかった。例えば江蘇宝应県を南下していた署理四川総督慧成は、太平軍の滁州占領は「琦善の兵力を分け、揚[州]城の包囲を解く」ための陽動作戦であると主張した。⁽⁴⁹⁾ また兵科掌印給事中の袁甲三は、北伐軍の進路について「謠言が四起し、人心は惶惑して殆んど手の打ちようがない」と述べたうえで、「目前の情形から論ずれば……、渡河北犯の計をなすことは断じてあり得ない」とあるように北京進攻の可能性を否定し、琦善と欽差大臣の向榮に揚州、南京での軍事作戦に専念するように求めた。⁽⁵⁰⁾

このように清朝側の見方が分かれた一つの理由は、太平軍が大運河を北上する最短のルートを取らず、西北へ軍を進めたことにあった。この北伐軍の戦略について周天爵は「もとより北に向かって徐州へ行こうとしたが、宿州に虎勇が駐守していると知り、敢えて北に來なかつた」⁽⁵¹⁾とあるように、広西で太平軍と交戦した経験をもつ自分が臧紆青（宿遷県拳人）の練勇を率いて守りを固めた結果だと主張している。

実際のところ大運河沿いの徐州は清軍の兵站基地であり、山東では杭州將軍瑞昌、理藩院尚書恩華が盛京、吉林、黒龍江兵を率いて江南へ向かっていた。⁽⁵²⁾これに対して安徽、河南方面は清軍の防備が手薄で、安徽巡撫李嘉端は湖北按察使江忠源が率いる楚勇に応援を求めたり、翰林院編集李鴻章が組織した練勇に頼らなければならな

かった。⁽⁵³⁾つまり太平軍の進撃ルートは清朝側の弱点をついたものだった。

6月2日に淮河を渡った太平軍はかなりのスピードで進撃し、13日には河南の歸徳府城を占領した。⁽⁵⁴⁾また3000人の兵力で救援にかけつけた陸應穀の軍を破り⁽⁵⁵⁾、黄河南岸にある山東曹県の劉家口へ兵を派遣して渡河を試みた。だが清朝側は「渡し船を北岸に集め、舵や帆柱を取り去って、渡河を禁止した」⁽⁵⁶⁾「北岸に集めた船を全て焼却した」とあるように、渡河に必要な船を太平軍に与えなかった。また黄河が増水したため、⁽⁵⁷⁾結局6月16日に林鳳祥らは「ここには船がなく、渡河し難いことを斟酌して……、全軍杞県へ向かった」⁽⁵⁸⁾とあるように別なチャンスを求めて西へ向かった。山東巡撫李鴻は「もし天陰の河流がなかったら、早いうちに北竄して深入しただろう」⁽⁵⁹⁾と報じたが、黄河は北伐軍の命運を左右する最初の障碍になったのである。

6月19日に河南の省都である開封に到達した太平軍は、城内の清軍を攻撃する一方で船を確保しようとした。⁽⁶⁰⁾当時開封の清軍兵力は2000人程度であったが、沈兆澧が大量の銀を用意して高額の賞金を保障したところ、民勇およびイスラム教徒である「回勇」4000名が熱心に防戦した。⁽⁶¹⁾また長距離の行軍で疲労していた太平軍は黄河の増水や悪天候に悩まされ、多くの病人を出して開封攻撃は失敗した。⁽⁶²⁾6月20日に林鳳祥らが朱仙鎮から南京へ送った戦況報告は、「臨淮からここまでは麦畑ばかりで、一枚の田も見あたらず、食糧に難儀している……。物資は全て足りているが、ただ米だけは手に入らない」⁽⁶³⁾と述べており、米食、麦食に代表される華南と華北の気候風土の違いが、北伐軍将兵の大きな負担になり始めていたことがわかる。

開封を撤退した太平軍は6月23日に鄭州を占領し、滎陽県を通過して25日に汴水県へ到着、26日には鞏県を占領した。⁽⁶⁴⁾このように太平軍が順調な進撃を続けることが出来た理由として、清朝の防備体制に不備があったことは否めない。

この問題を最初に提起したのは安徽の団練結成に努めていた袁甲三で、彼は周天爵、李嘉端の2人では太平軍を鎮圧出来ないと次のように訴えた。

周天爵の忠義ぶりは誰もが認めるところだが、逆匪の殲滅を思うあまり、高齢もあって精神が集中できず、考えが定まらない。何かあればすぐに吐血し、最近も数回起きている……。しかも淮北に注意が偏り、淮南まで顧みることができない……。

李嘉端は性格がはきはきしており、果敢で有能だが、仕事に当たることが急に過ぎて配慮が周到でない。現在賊気がすでに迫っており、李嘉端は練勇を招いて弾圧を図り、お陰で人心は安定したが、突然の変化によって経費が足りなくなっ

た。しかも淮北では周天爵が別に計画を進めているが、気脈は通じず、お互いに呼応し合えない。⁽⁶⁵⁾

このうち金田蜂起時に広西巡撫となった周天爵が「仕事に勇敢に当たるが、人を用いることが出来ない」⁽⁶⁶⁾とあるように独善的で、欽差大臣李星沅や広西提督向荣らと激しく衝突して解任されたことは良く知られている。この北伐作戦でも周天爵は咸豊帝からなぜ鳳陽に進出した太平軍を捕捉出来ず、また臧紇青の練勇を率いて決戦を挑まなかったのかと叱責を受けた。⁽⁶⁷⁾ このとき周天爵は太平軍の追撃にあたって陸應穀に手紙を送り、「賊が歸徳に至っても、決してみだりに戦ってはならず、私が到着するのを待って挟み撃ちにするように頼んだ」にもかかわらず、陸應穀は軽率に戦って敗れたのだと非難している。⁽⁶⁸⁾ こうした官僚同士の連携の悪さは、懷慶攻防戦でも繰り返されることになる。

次に清朝側の問題点として浮かび上がったのは、官兵の志気の低さであった。むろん清軍の腐敗はこのとき始まったことではなかったが、今回槍玉にあがったのは「勁旅」即ち精鋭をもって聞こえた黒龍江の騎兵部隊で、浦口に太平軍が上陸すると「一戦即潰」とあっけなく敗北した。⁽⁶⁹⁾ この敗北の責任をとってチャハル都統の西凌阿は免職処分を受け、太平軍の追撃を命じられた。⁽⁷⁰⁾

この浦口敗戦の原因を分析した欽差大臣琦善は、太平軍が鉄砲を多用していること、騎兵は白兵戦には向かないばかりか、馬も各地から集めたもので調教が行き届かず、一度砲声を聞くと驚いて逃げってしまうこと、黒龍江兵の得意とするのは弓箭だが、矢が尽きてしまえば手の打ちようがなく、歩兵と組み合わせて使わなければ意味がないと指摘した。そして琦善は八旗兵の俸給が緑営兵の倍であると述べたうえで、経費不足の折から緑営兵を多用する方が得策だと提案するほどだった。⁽⁷¹⁾

つぎに批判を浴びたのは河南巡撫陸應穀と各地の府城、県城を守る地方官たちだった。歸徳で太平軍に敗れた陸應穀は粗末な姿で許州に逃げ戻り、兵士たちがその行方を尋ねるほどに軍は混乱した。⁽⁷²⁾ その結果「巡撫が敗れたので、官兵は益々おじ気づき、紛々として逃散したため、防禦のしようがなかった。該匪はこれに乗じて前進し、歸徳から数日で開封に至った」⁽⁷³⁾とあるように、清朝側の守備は総崩れとなった。とくに目立ったのは地方官がその家族を避難させ、住民がこれに続いて城が無人と化してしまうパニック現象だった。西凌阿は「途中の州県は多くがあらかじめ避難し、城は空となって賊のやりたい放題に任せており、決して嬰城を固守しようとししない」⁽⁷⁴⁾と嘆いている。

さらに清軍の混乱はさまざまな悪影響を生んだ。帰徳では商邱県知県の宋錫慶が逃亡すると、「奸細の接応」⁽⁷⁵⁾によって太平軍が南北両門から城内へ突入した。張維城によるとこのスパイとは清軍の守備兵で、「あえて抵抗せず、城壁を降りて門を開けた」⁽⁷⁶⁾のだという。また鄭州では陝西から徴発された官兵が指揮官を殺害して、太平軍に殺されたという流言をまき散らし、驚いた住民が避難した後に略奪を働いた。鞏県が陥落したのも彼らに続いて太平軍が到着したためだったとある。⁽⁷⁷⁾

ところで太平軍はいかなる問題を抱えていたのだろうか。すでに見たように太平天国は当時の総兵力である 50 ケ軍のうち 9 ケ軍をこの北伐作戦に投入した。それが妥当な数であったかは評価の分かれるところだが、少なくとも 2 万人強の兵力で北京を占領できるとは考えておらず、途中兵力の増加を見込んでいたと思われる。

たしかに李嘉端は北伐開始直前の安徽について「群盜は毛の如し」⁽⁷⁸⁾と報告しており、先に見た (B) の周天爵上奏も太平軍に 2000 ～ 3000 人の捻子が加わっていたと述べている。また 1853 年 7 月に斥候に出たところを捕らえられた王毓高（河南閿郷県人）は、「久しく長髪賊に投じた」捻子頭目の楊遇升に従って浦口から開封まで従軍しており、⁽⁷⁹⁾ 黄河渡河後の太平軍については「長髪は僅か数百で、残りはみな脅された湖南、湖北、江寧（南京）、揚州の人か安徽、河南の捻匪で、捻匪が最も多い」⁽⁸⁰⁾といった証言もある。

しかし北伐軍における新規の参加者は、湖南から南京までの爆発的な人数拡大に比べると少なかった。むしろその第一の理由は華南と華北の社会状況の違いに求められる。また見逃せないのは北伐軍の進出した地区で、直前に清朝の捻子に対する厳しい弾圧が行なわれたことだった。周天爵の軍事行動はその一つで、彼は太平軍が臨淮に進出する直前にこの地の捻子呉殿揚の掃蕩戦を進めた。⁽⁸¹⁾ また河南では帰徳府知府陳介眉らが永城県、虞城県一帯の捻子陳毛、張明塘らに対する大弾圧を行ない、700 名以上を殺害した。⁽⁸²⁾ 帰徳では首切り役人が余りの酷さに恐れをなし、盲目の者を探して処刑を代行させたという。その後帰徳では報復の噂が絶えず、府城が陥落する遠因を作った。⁽⁸³⁾ だがこうした措置は結果として太平軍の勢力拡大を最小限に抑えたのである。

次に北伐軍が直面した問題は重火器の不足であった。これがクローズアップされたのは開封攻撃の時点で、「該匪は城付近の村に隠れたが……、兵勇は千斤余りの大砲を放ち、壁を崩して賊匪を死傷させた」⁽⁸⁴⁾とあるように、城内からの砲撃によって多くの死者を出して撤退した。また見逃せないのは逃亡兵が多かった事実で、山道で隠れ

場所が多い鞏県では多くの兵が行軍中に隙を見て脱走した。⁽⁸⁵⁾ 陳思伯も朱仙鎮で点呼をしたところ、「新掠の淮民」が7500名も逃げてしまったと述べている。⁽⁸⁶⁾

このように太平軍の内情は決して万全ではなかったが、なお比較的順調に作戦活動を進めることが出来たのは、これを追う清軍の動きが鈍かったためであった。太平軍の追撃を命じられた西凌阿と江寧將軍托明阿は、歸徳から100キロ程度の距離しかない開封までなかなか到達せず、咸豊帝に故意に進撃を遅らせているとして叱責された。⁽⁸⁷⁾ また河南の救援を命じられた周天爵は徐州の戦略的重要性を主張して動かず、⁽⁸⁸⁾ 許州へ落ちのびた陸應穀は太平軍を追って黄河を渡ろうとはしなかった。⁽⁸⁹⁾ こうした現実について河南学政張之萬は次のように語っている

賊匪は火薬が少なく、食糧も尽きかけており、もし精鋭が攻撃すれば、たちまち撲滅できる。だが如何せん安徽からの追撃部隊は到着せず、巡撫（陸應穀）も許州に退いたままで、動員された兵も揃わない。開封の兵はもとより少なく、郷勇を招いてようやく城を守るに足るだけなのに、どうして城門を開いて進攻出来るのか……。その実は賊がいよいよ熾んなのではなく、わが兵がいまだ集まらないのである。⁽⁹⁰⁾

この清軍の非能率と足並みの悪さは、黄河の警備についても同じだった。6月25日に直隸総督訥爾經額は「河南省の考城、祥符、蘭儀などの渡しは……、一人の兵も守っておらず、人の行き来も通常通りで、昼夜続いている。もし逆匪が紛れ込んだら、雨風や暗闇の中では賊か、民か区別がつかず、害をなすことは言うに堪えない」⁽⁹¹⁾ と述べ、場所によっては全くの無警戒であると警告を発した。はたして6月27日、太平軍は鞏県で船を獲得して黄河の渡河作戦を開始した。⁽⁹²⁾ 清朝の柔軟さを欠いた防衛体制では太平軍の華北進出を阻むことは出来なかったのである。

Ⅲ. 懷慶攻防戦にみる太平天国

1. 黄河渡河作戦と懷慶攻撃の開始

太平軍による黄河の渡河成功は、清朝側にとっては晴天の霹靂だった。最初にこの事実を北京へ伝えたのは詹事府少詹事の王履謙で、渡し場のない洛河で太平軍が船を手に入れたのは「実に想像できなかった」ことであり、「必ずや地元の奸匪が結んで導いた」⁽⁹³⁾ 結果であると報じた。また知らせを受けた陸應穀も「賊は皮水羊（一種の浮き袋）に乗って川を渡し、船を奪って渡河したというのだが、もとより未だ深くは信じられない」⁽⁹⁴⁾ とあるように驚きの声を上げている。

それでは実際の情況はどうだろうか。張維城の供述や『復生録』、開封府知府賈臻の証言などを総合すると、6月27日に太平軍は鞏県の洛河に遺棄された石炭運搬船数十隻を獲得した。はじめ太平軍は汜水県の渡口に浮き橋を作って全軍を渡河させようとしたが、水量が多いために断念し、28日から揚州、儀徵県出身の船乗りに漕がせて渡河を開始した。船が少ないため、馬に乗ったり泳いで渡る兵士もいた。だが多くの船が途中で沈んでしまい、数千人が命を落とした。陳思伯も水中に投げ出されたが、同郷出身の百長曾廷達に救われたという。結局7月5日までに六、七割の兵士が黄河を渡り終えた。⁽⁹⁵⁾

ところで張維城は「丸一日河を渡ったが、一人の兵も追って来なかった」⁽⁹⁶⁾と述べている。清朝から河南各軍の統括を命じられた托明阿が、西凌阿と共に滎陽県に到着したのは6月30日のことで、黄河南岸に残る太平軍の後衛部隊に攻撃をかけたのは7月1日以降のことだった。⁽⁹⁷⁾ 清軍に捕捉されたこの部隊は2000名近い死者を出し、残余の3000～4000名は南下して西征軍との合流をめざすことになる。⁽⁹⁸⁾

さて黄河北岸に到達した太平軍は温泉東部の河辺にある柳林に集結し、7月2日には温泉城を占領した。⁽⁹⁹⁾ この時太平軍と一戦を交えたのが、在籍前太常寺卿の李棠階⁽¹⁰⁰⁾（懷慶府河内県人）の率いる郷勇である。

『李文清公日記』によると、南京陥落後の1853年3月に各地の紳士に対して、地方官と協力して団練結成のための「捐輸（寄付）」を行なうように指示があった。だが李棠階は「官民紳士が互いに信頼しない」現状では結成が難しいと考えた。すなわち官民の信頼関係がなければ、団練経費を寄付する者はなく、いきおい割り当てることになるが、それは胥吏に搾取の機会を与える結果にしかならない。李棠階はこれが決して杞憂ではなく、この目で目撃した事実なのだと強調している。⁽¹⁰¹⁾

この団練結成の難しさは、当時の河南各地で共通する問題であった。この頃西部の科挙試験を監督していた河南学政張之萬は、地方官にこの点を問い正したところ、「やや取り組み方を知っているが、まだ成果が現れていない者もいれば、漫然として対策を考えず、ただ実行は難しいとの一言で責任逃れをしている者もいた」と報じている。そして団練の結成には官の適切な指導が不可欠であり、中央から大官を派遣して団練の結成と壮勇の募集を監督させるように求めた。⁽¹⁰²⁾

そこで李棠階らがまず取り組んだのは、「各村を互いに団結させ、隣村と連絡を密にして、盗賊を防ぎ土匪に備える」とあるように、地域の結束と治安強化に重点を置いた友助社と呼ばれる組織の結成だった。彼は河内県知県裴寶鏞、懷慶府知府余炳燾

に働きかけ、搾取の口実となる経費の徴収を行なわないこと、参加者に城の防衛や遠隔地への出征は強要しないことを約束させた。

太平軍接近のニュースは6月中旬に懷慶へ届き、歸徳から逃げ帰った商人たちの話に「人心はすでに皇々」となった。また6月下旬には黄河南岸を進む太平軍が清軍と戦っている様子がわかるようになった。この時有力者の中には「寨を築いて寇を防ぐ」者も現れたが、なお多くの者は「賊は必ずしも来るとは限らない」と言って意見はまとまらなかったと李棠階は記している。

太平軍が渡河を始めると、遊撃穆奇賢の率いる清軍は傍観するばかりで、上陸を阻止できないまま敗走した。太平軍が食糧調達のために村々へ姿を見せると、李棠階と任殿揚（武舉人）を中心に「村々が互いに防禦」する動きが広がった。彼らは尻込みする穆奇賢を後目に、太平軍の小部隊を襲ってはその将兵を殺した。⁽¹⁰³⁾ 7月初めに林鳳祥らが温県で出した布告は「不法の頑民が妖魔によって惑わされ、僅かな利益を貪って郷勇となり、あえて金兵に抵抗している」「本大臣はもとより民を愛することを心にとめており、尽く滅亡させてしまうのは忍びない……。ゆめゆめ天法に背いて命や家を失うことなかれ」⁽¹⁰⁴⁾ と述べており、太平軍が郷勇の抵抗に悩まされていたことを伝えている。

この勝利に勢いづいた李棠階らは、7月2日に柳林の太平軍本隊に攻撃をかけた。だが多くの村々は集合場所に姿を見せず、集まった人々も「訓練を受けていないために、命令を聞かなかった」とあるように統制が取れなかった。はたして戦闘が始まると郷勇は銃声に怯え、李棠階を見捨てて逃げ出した。太平軍は温県を占領し、抵抗した村々に容赦ない攻撃を加えたという。⁽¹⁰⁵⁾ この李棠階の例は正規軍の支援を欠いたまま、訓練不足によって敗れた団練の姿を良く示している。

さて7月8日から太平軍は黄河北岸の重要拠点である懷慶の攻撃を開始した。北伐の戦局に大きな影響を与えたと言われる懷慶攻防戦の始まりである。近年このとき懷慶城内にいた2人の人物による手記が公開され、いくつかの新事実が明らかになった。以下ではこの新史料を中心に57日間におよぶ戦いの内容を見ていきたい。

田桂林『粵匪犯懷慶実録』によると、懷慶府城の防衛力強化は太平軍が黄河を渡河している6月28日から着手された。知県裘寶鏞は紳士と協議のうえ準備に取りかかり、大型大砲を試し撃ちしたところ、震動で城壁の一部が崩れてしまい、小火器しか使えなかった。このため不安となって脱出する者が多く、城内には数千人しか残らなかった。また密偵に対する警戒が強化され、夜には城の内外にかがり火や提灯がともされ

た。翌日には付近の川から水を引いて城の周囲に濠を作るなど、一応の警備体制が整った。⁽¹⁰⁶⁾

さて従来は懷慶攻防戦の開始にあたり、知府余炳燾と裘寶鏞は清朝皇帝の恩を説いて人々に抵抗を呼びかけ、これに感動した住民が太平軍を撃退したと言われてきた。⁽¹⁰⁷⁾『復生録』も「淮慶〔懷慶の誤り〕城内は元々兵が多くなかったが、聞くとところではこの郡を守る者は深く民心を得て、民を督して城を守り、昼夜解かなかった」⁽¹⁰⁸⁾と述べている。

それでは実際はどうだろうか。田桂林によると、6月30日に太平軍の密偵が捕らえられて処刑された。だが元々臆病だった余炳燾は処刑を見て下痢をしてしまい、城に登れなかった。またその晩に知県裘寶鏞は側近を引き連れて西門に至り、偵察に出るから開門せよと命じた。だが紳士たちは「あなたは一県の主人だ」と言ってこの命令を拒否した。すでに裘寶鏞は家族を九道堰に避難させており、自らも脱出を図ったのである。逃げられないと知った裘寶鏞は真剣に府城の防衛に取り組んだという。

7月2日に清軍将校を装った「馬賊」五騎が懷慶城に至り、緊急文書と軍事機密があるので開門するように求めた。守備側が発砲して彼らを追い払うと、ついで失陥した温県知県張清瀛が姿を見せ、泣きながら窮状を訴えた。しかし守備兵たちは張清瀛が太平軍の先導役を勤めたと考え、「お前が賊を郡城まで連れてきたんだろう。よくもここで話が出来たものだ」と口を極めて罵った。李棠階も指摘した官民間の強い不信任感が窺われる。

またある日門番の蔡なる人物が懷慶城を脱走した。裘寶鏞が連れ戻すために追っ手を派遣すると、捉えられた蔡はラバに銀2000両分の「官宝」を隠していた。怒った裘寶鏞はこれを没収し、各城門で守備についている人々に1272文ずつ分け与えた。すると「好官！」と叫ぶ歓声が城中に湧きあがり、警報が出ると勇んで守備についた。結局官民間の溝を埋めたのは、貪官汚吏に対する処分だったのである。

さて太平軍による懷慶攻撃の開始について、田桂林は次のように記している

賊の来たるや、頭に竹笠をかぶり、足に草鞋をはき、大褂を着て蕉扇を持ち、兵器を見せずに悠然と姿を見せた。和風楼で見張っていた識者が「これは賊だ！」と叫び、砲撃を加えた。賊はついに東西に分かれ、城を鉄の筒のように取り囲んで、一斉に銃火を浴びせた。弾丸は拳や卵くらいの大きさで、雨や雹のように降り注いだ……。

初三日から初五日(西暦7月8日から10日)まで、賊の攻撃は大変激しかったが、

城上は優勢を保ち、無数の賊匪を殺した、賊は城上を妖猫と呼び、城上は賊を鼠賊と呼んだ。賊は不利とわかると初六日（同じく 11 日）に包囲を解き、遠い者は各郷村に住み、近い者は四閩の屋敷に隠れた。⁽¹⁰⁹⁾

また葉知幾『守城日志』は太平軍の攻撃について、東南の樹林に五色の旗が揺れて指揮を取り、騎兵と歩兵が数里にわたって隊列を作って前進したこと、懷慶府城の東側に殺到し、激しい砲撃を加えたと述べている。⁽¹¹⁰⁾ さらに李棠階によれば、太平軍は懷慶城の北側を流れる沁水対岸の水北関を占領して攻撃を加えたという。⁽¹¹¹⁾

2. 懷慶包囲戦に見る太平軍と清軍

ところで太平軍が懷慶を攻撃した目的は何だったのであろうか。北伐軍の追撃を命じられた内閣学士・幫辦軍務勝保は、懷慶の土地が豊かで、火薬の生産に不可欠な硝磺の産地であること、地形的にも重要であることを挙げている。そして捕らえたスパイの供述として、「逆首林鳳祥の意図は城を破って固守し、もって南援を待つことにある。もし懷慶を落とせば、人民二十万が手に入り、銀物は無数で、鉄砲も火薬もみな足りる。どうして存分に北竄出来ないと憂える必要があろうか」⁽¹¹²⁾ と報じた。太平軍の目的がまず援軍（あるいは黄河渡河に失敗した後衛部隊）との合流にあったこと、懷慶で兵力と装備を充実させれば、さらなる北進が可能だと考えていたことがわかる。

懷慶を一気に攻略することが難しいと知った太平軍は、城外の家屋や木材、土を使って城を取り囲むように陣地を構築し、兵糧攻めを行ないながら、24ヶ所の地下道を掘って地雷を仕掛け、城壁を爆破する作戦に出た。この地雷攻撃は太平軍の得意技で、武昌や南京ではこれをきっかけに城が陥落した。懷慶では7月15日から3回にわたって地雷が爆発し、知県裴寶鏞が負傷した。だが太平軍は攻撃に先立って礼拝を行なったため、守備側は爆破後すぐに城壁の穴を埋める作業を準備出来たという。⁽¹¹³⁾

また元方防衛力に不安を抱えていた懷慶城内では、陥落を恐れた人々が太平軍の到着前から食糧を城外へ持ち出した。知県裴寶鏞らは生員呉應麟らの建議を容れて、近隣の商人から食糧を買い付けると共に、城内に支応局、平糶局を設けて物資の統制と貧民に対する穀物の配給を行なった。だがこれらの措置によっても「城内の小麦は一斗につき一六〇〇文の値段がついたが、値はあっても物はなく、買える場所がなかった。烙餅は三、四銭の重さで一個十二文、豚肉は一斤六百文したが、六月中旬（即ち西暦の七月中旬）からは豚肉も途絶えた」とあるように、籠城戦の開始とともに飢餓

にさいなまれた。太平軍も城内の食糧不足を知り、將兵たちは饅頭や肉を城上へ押し上げて投降を呼びかけたが、守備側はこれを拒否した。また栄養不足から疫病が流行し、多くの死者が出たという。⁽¹¹⁴⁾

なお太平軍の食糧は付近の民衆との交易によってまかなわれた。懷慶府西部の濟源県、孟県の人々が太平軍に物資を供給し、地方官もこれを禁止出来なかった。李棠階はこれを懷慶の西側に清軍が陣を敷かなかった結果だとしたうえで、「初めは米、果物などを賊に与えていたのだが、賊が良い値段で彼らを誘ったために、愚民は利を貪って絶えることなく、ついに市場が出来る程だった」⁽¹¹⁵⁾と述べている。また太平軍は將兵の掠奪行為や婦女暴行を厳しく禁じ、「偽りの仁義」によって「人心を収めんとした」⁽¹¹⁶⁾とある。

さて太平軍を追って黄河を渡った江寧將軍托明阿らが、懷慶城東の徐堡鎮に到着したのは7月18日のことだった。翌日清軍が攻撃を始めると、城内の人々は援軍の到着に喜び、粥や烙餅を作ってもてなしの準備を始めた。初め太平軍は敗走したが、器や皿、衣服を路上に投げ出すと、官兵はこれを拾おうと夢中になり、太平軍の反撃を受けて敗北した。⁽¹¹⁷⁾ また7月23日には理藩院尚書恩華の軍が懷慶東北の清化鎮に到着したが、26日に大名鎮総兵董占元の部隊が大敗を喫した。⁽¹¹⁸⁾ 以後恩華らは城内からの再三の要請にもかかわらず攻撃をかけなかった。失望した住民たちは家族を連れて城外へ打って出ることを考えたが、田桂林に諫められて思いとどまったという。⁽¹¹⁹⁾

太平軍の黄河北岸進出に事態を重く見た清朝は、托明阿、恩華以外にも内閣学士・幫辦軍務勝保、山東巡撫李德、山西太原鎮総兵烏勒欣泰を懷慶へ派遣した。⁽¹²⁰⁾ また直隸總督訥爾經額を欽差大臣に任命して各軍を統括させ、自ら懷慶へ赴いて指揮に当たらせた。⁽¹²¹⁾ だがこうした措置にもかかわらず、清軍の作戦活動ははかどらなかった。7月30日から3日間にわたり太平軍と戦闘を交えた勝保は、その上奏で次のように述べている

現在の兵力はまことに聖諭の如く、厚くないとは言えないが……、如何せん各路の官兵は多いと言っても、実際に賊と真剣に戦う者は多くない。例えば北路の陣地はすでに遠く、戦闘時も川を隔てて鉄砲を撃つだけで、距離が遠過ぎるために、賊はほとんど意に介さない。西路は現在兵がおらず、托明阿らの東路はなお良く私と呼応しているが、その官兵はまた多くが前進しようとしなない。このため各路の兵は一万数千人いるとは言っても、実際に力を出せるのは十分の一、二に過ぎない。これらは皆統率の仕方が要領を得ないために、兵がおじ気づいて闘志

を欠き、加えて敗戦を粉飾するために、戦死した将兵は報われず、志気はさらに奮わなくなるのである。⁽¹²²⁾

勝保は別の報告でも配下の天津兵 1000 名について、出陣が可能なのは 500 名に過ぎず、さらに拠点の防衛に必要な兵力を除くと、敵陣に突撃できる兵力は 100 名程度だと述べている。⁽¹²³⁾ また 8 月 12 日に恩華は丹河対岸の太平軍陣地を攻撃し、勝利を収めたと報じたが、太僕寺卿王茂蔭が告発したようにその内容には粉飾が多かった。⁽¹²⁴⁾ さらに勝保が攻撃をかけた 8 月 1 日は、もともと恩華も総攻撃を予定していた。だが「賊が沁、丹両河の間に陣取っているために、文報は回り道をせざるを得ず、三方面（東北の恩華、李徳、東南の勝保、托明阿、西北の烏勒欣泰）の気脈はすこぶる連絡し難い」⁽¹²⁵⁾ とあるように、各軍はほぼ連携を欠いたまま作戦を行わざるを得なかった。

こうした清軍の非能率さこそは、懷慶城の東側へ布陣したことで太平軍の東進を阻んだものの、見るべき戦果を挙げられなかった最大の原因と言えよう。

8 月中旬に入ると懷慶城内の食糧が底をつき始め、勝保は托明阿、貴州提督善禄および新たに戦線に到着した陝西西安副都統雙成、陝安鎮総兵郝光甲の部隊と協力して城内との連絡をつけようと図った。8 月 17 日、26 日に勝保は兵士に救援物資を携帯させ、土塁を築きながら前進する牛馬牆の戦術で太平軍の防衛線を突破しようとした。⁽¹²⁶⁾ 両面に敵を受けた太平軍は激しく抵抗し、18 日夜の反撃では林鳳祥みずから 5000 名の兵を率いて出陣した。⁽¹²⁷⁾ このとき勝保が「懷 [慶] 郡に到着しらい十数回の戦闘を行ない、倒した賊は数千名を下らないが、真の長髪賊を殺したのは今回が一番多い」⁽¹²⁸⁾ と報じたように、陣地をめぐる攻防は太平軍にも大きな戦力の消耗をもたらした。

このころ懷慶の包囲を解く方法を上奏した河南学政張之萬は、籠城を続ける「忠義の官民」を餓死させずに救出できるかどうかは、今後の戦局に重大な意味を持っていると述べた。そして彼は現在最も憂慮すべきは、清軍各大臣の意見が合わずに北伐軍の殲滅が遅れてしまうことであり、その間に防備の手薄な山東へ向かって別の太平軍が北上し、河南の捻子と結びつくことだと指摘した。⁽¹²⁹⁾

実際に黄河を渡河出来なかった南返軍が 8 月下旬に安慶へ帰還した時点で、南京がすぐに北方へ増援軍を送っていたら、その後の展開は違うものになっていたかも知れない。だが張維城が「現在南京からは手紙が来ず、懷慶の賊も南京へ手紙を送ることができない」⁽¹³⁰⁾ と供述したように、北伐軍と南京との連絡は途絶えたままであった。

南京側としても次なる有効な戦略を打ち出すことは出来なかったものであり、この意味で援軍との合流を第一の目的として戦われた懷慶攻防戦は太平軍の失敗に終わったと言える。

さてこうした現実を前に、北伐軍にとって可能な一つの選択は、各地から懷慶救援に派遣された清軍を可能な限り引きつけ、その追撃を振り切って西北方面へ進出することだった。すでに8月中旬に勝保は捕虜およびスパイの証言から、太平軍が総司令部を懷慶城の西側へ移し、脱出を図っているとの情報を得ていた。⁽¹³¹⁾ また8月25日には欽差大臣・直隸総督の訥爾經額が清化鎮に到着し、天津から数千斤の巨大な大砲を取り寄せて攻撃をかける準備が進められた。⁽¹³²⁾

太平軍が懷慶からの脱出作戦を始めたのは8月30日のことだった。これに先だって太平軍は懷慶城内へ矢文を送り、一兩日中に懷慶を去ると述べたうえで、「なんじら懷慶はみな好百姓だ、我らを追ってはならぬ。追えば戈を返して戻り、なんじを殺してニワトリ、犬たりとも留めぬ」⁽¹³³⁾ とあるように、守城側に太平軍を追撃しないように警告した。また撤退にあたっては羊や犬をつるして太鼓を叩かせ、普段通りに煙をたき、かがり火をともしなどのカモフラージュをしながら、9月1日までにほぼ全軍が西へ撤退した。⁽¹³⁴⁾

太平軍の懷慶撤退後、訥爾經額は2日未明に太平軍陣地へ総攻撃をかけ、2000名の太平軍將兵を殺害して、懷慶の包囲を打ち破ったと報告した。⁽¹³⁵⁾ この知らせを受けた咸豊帝は大いに喜び、育ての親である康慈皇貴太妃に勝利を報告すると共に、軍機処に「喜報紅旌」の4文字を記した朱筆の匾額を送った。⁽¹³⁶⁾

だがこの訥爾經額の報告は事実ではなかった。9月4日に太平軍が山西垣曲県へ入ったことを知った山西巡撫哈芬は、「私の調べと太原鎮総兵烏勒欣泰の証言によれば、元々二十九日（西暦の9月2日）の卯刻に攻撃をしかける筈だったが、彼らはすでに二十八日（9月1日）に全て逃竄してしまい、二十九日になってようやく気づいたが、共にもぬけの殻だった。査するに訥爾經額の木柵を攻め破り、賊匪の逃げおおせた者は多くないとの報告は、いまだ真実を尽くしていないと言わざるを得ない」⁽¹³⁷⁾ と告発した。この秘密の報告に驚いた咸豊帝は、訥爾經額らに事実を問いただした。これに対して訥爾經額は9月16日の上奏で、2000名の「賊匪」を殺したのは「遠近の紳民が共に見聞きた」事実であると主張して譲らなかった。⁽¹³⁸⁾

それでは実態はどうであったのか。『粵匪犯懷実録』によると、9月1日晚に異変に気づいた守城側が斥候を放つと、すでに太平軍は去った後だった。追撃を恐れた太

平軍は城門の外に大量の米や麵を残していった。そして田桂林は次のように述べている。

守城の人は長い間飢えに苛まれてきたので、城外に米や麵が山のように積まれているのを見て、一斉に米や麵を取りに出かけた。官兵は賊匪が去ったとは知らず、賊ではないかと疑って、連環砲を撃ちながら進撃してきた。そこで人を回り道で軍営へ派遣し、「これはみな守城の百姓で、城を降りて食糧を取っているのだ。賊ではない。賊はすでに行ってしまった」と知らせた。官兵の連環砲はようやく止んだ。⁽¹³⁹⁾

この史料から見る限り、訥爾經額らが殺害した「賊匪」とは、その実食糧に殺到した懷慶の民衆だったと考えられる。9月2日朝に清軍は懷慶城内へ入城したが、清兵とくに黒龍江兵の略奪行為は激しかった。李棠階はその日記で、彼らが住民から奪った財物を売りに出したために、市場が出来るほどだったと憤激をこめて書いている。⁽¹⁴⁰⁾

Ⅳ. おわりに

本稿は太平天国の北伐史のうち、その前半部分を検討した。それによると北伐軍の当初の兵力は2万人強で、清朝の防御態勢が未整備だったこともあって、大きな抵抗を受けずに軍を進めた。だが途中の参加者は南京までの過程に比べると少なく、黄河渡河作戦で多くの兵を南岸に残したために、援軍あるいは後衛部隊との合流を一つの目的として懷慶攻防戦が行なわれた。その結果は必ずしも太平軍の勝利とは言えず、懷慶を脱出した太平軍は「実に饑疲の卒」⁽¹⁴¹⁾とあるように消耗が激しかった。だが太行山脈に入った太平軍は本来の機動力を取りもどし、直隸へ進出して新たな戦局を形作ることになった。

いっぽう城の防衛にあたった懷慶の住民が払った代価は大きかった。田桂林はその褒美として、明代に高く設定されたこの地の税額を引き下げる要望を出すように紳士たちと申し合わせたが、結局誰もこの話を切り出さず、チャンスを逃してしまったと述べている。⁽¹⁴²⁾ だがこうした人々の不満は、郷勇を組織した経験と共に積み重なっていった。「賊が過ぎた後に民心は乱を思い……、各県がことごとく人々を集めて団練を作り、抗差抗糧をした」⁽¹⁴³⁾とあるように、懷慶一帯では1854年から激しい抗糧暴動が展開されたのである。

注

- (1) ここでいう「邪教」とは直接的にはカルト宗教をさすが、歴代王朝が民間宗教結社を弾圧してきた歴史をもつ中国では、その意味する範囲は広く、断定の方法も多分に恣意的であった。じつじつ2001年に広州で開かれた太平天国に関する国際学術研討会では、ある代表から「拝上帝会は邪教か」という問題提起がなされた。なお社会問題研究叢書編輯委員会編『論邪教—首届邪教問題国際研討会論文集』广西人民出版社、2001はこうした傾向を示す一つの例である。
- (2) ここでは国民革命期および南京国民政府を扱った著作として、北村稔『第一次国共合作の研究』岩波書店、1998、家近亮子『蒋介石と南京国民政府——中国国民党の権力浸透に関する分析』慶應義塾大学出版会、2002を挙げておきたい。
- (3) 孫文はその生涯で3度北伐を計画している。最初は1911年4月の黄花岗蜂起で、両広占領後に南京、北京攻略をめざすことになっていた。2度目が1917年からの広東軍政府時代で、翌年広西派の陸榮廷らによって大元帥辞任に追いこまれて挫折した。3度目は陳炯明が聯省自治を進めた1922年のことで、北伐を強要する孫文に陳炯明が反旗を翻し、孫文を上海へ追放した。このように孫文の北伐計画は全て失敗に終わったが、北京攻略にかかる情熱が彼の太平天国への傾倒に裏づけられていたことは間違いない。なお蒋介石も南京到達後の1927年5月に、なぜ北伐を急ぐのかと問う田中義一に対して「太平天国と同じ失敗をくり返す訳にはいかない」と答えている（黄仁宇著、北村稔等訳『蒋介石——マクロヒストリー史観から読む蒋介石日記』東方書店、1997、82頁）。太平天国の北伐がその後の中国近代史に与えた影響力の大きさが窺われる。
- (4) 羅爾綱『増補李秀成自述原稿注』中国社会科学出版社、1995、382頁。なおここで李秀成は「天朝之失悞」10ヶ条の筆頭に「悞国之首、東王令李開芳、林鳳祥掃北敗亡之大悞」と述べ、第2に曾立昌らによる北伐援軍の敗北を挙げている。
- (5) リンドレー著、増井経夫・今村与志雄訳『太平天国——李秀成の幕下にありて』平凡社東洋文庫、1964、203頁。
- (6) 郭廷以『太平天国史事日誌』重慶商務院書館、1946。
- (7) 簡又文『太平天国全史』香港猛進書屋、1962。
- (8) 羅爾綱『太平天国史』中華書局、1991。
- (9) 太平軍北伐に関する専著としては王天獎『太平軍在河南』河南人民出版社、1974、河北、北京、天津歴史学会編『太平天国北伐史論文集』河北人民出版社、1986、張守常・朱哲芳『太平天国北伐、西征史』广西人民出版社、1997。張守常『太平軍北伐叢稿』齊魯書社、1999。また代表的な論文としては江地「太平軍北伐戦争—兼談初期捻軍の抗清闘争（1855.5~1855.5）」山西師学院学報、1957年1期（中国太平天国史研究会編『太平天国史論文選』三聯書店、1981、303頁所収）、舒翼「太平軍北伐戦役的幾個問題」『歴史教学』1979年7期、鄒身城「太平天国北伐主帥辨疑」『南開大学学報』1981年1期（いずれも『人民大学報刊復印資料』中国近代史K3所収）などがある。
- (10) 堀田伊八郎「太平天国の北征軍について—その問題点の一考察」『東洋史研究』36巻1号、1977。

- (11) 吉澤誠一郎「天津団練考」『東洋学報』78 卷 1 号、1996 (『天津の近代—清末都市における政治文化と社会統合』名古屋大学出版会、2002、38 頁所収)。
- (12) 中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』(以下『鎮圧』と略記) 第 6 輯～17 輯、1992～1995 が太平天国の北伐と直接関連している。
- (13) 中国社会科学院近代史研究所編『太平軍北伐資料選編』齊魯書社、1984。
- (14) 台湾故宮博物院編『宮中檔咸豐朝奏摺』(以下『宮中檔』と略記) 第 6 輯～第 12 輯。ここで簡単に『鎮圧』と『宮中檔』の関係について述べておく。『鎮圧』は中国第一歴史檔案館の軍機処奏摺録副(即ち軍機処檔案)・農民運動類をベースとしたもので、これに剿捕檔、上諭檔および『欽定平定粵匪方略』の稿本、一部宮中檔案を用いて編集されている。この『鎮圧』は後半に出版計画を圧縮したこともあり、反清項に収められた太平天国時期の各地反乱に関する記事を中心に遺漏が見られるが、北伐史に関する限りかなりトータルな史料集である。一方『宮中檔』は皇帝に届けられた上奏文の原本で、咸豐朝については多くが台湾に所蔵されているが、地方と北京を往復するうちに文書が紛失することもあり、それ自体完全な内容ではない。だが年月順に排列されているために、『鎮圧』が編纂過程でオミットした同時代の史料を参照したり、副本である軍機処檔案がかかえる誤字や判読不能な文字を確認することが可能である。本稿では引用史料について、基本的に入手の容易な『鎮圧』に基づいて表記するが、必要に応じて『宮中檔』を用いることにしたい。
- (15) 林鳳祥の原籍については、かつて広東揭陽県説、広西武鳴県説などがあったが、『天兄聖旨』巻 1、庚戌年八月十三日の条に「白沙林鳳祥被外賊侵害之事」とあり、桂平県白沙の人であることが判明した。なおここで言う林鳳祥の事件とは 1850 年の耕牛事件のことで、これによって拝上帝会と団練の衝突が始まった(王慶成編注『天父天兄聖旨—新發現的太平天国珍貴文獻史料』遼寧人民出版社、1986)。
- (16) 錦倫奏審録林鳳祥等人供詞摺、咸豐五年正月下旬(「新發現的有關太平軍北伐的史料——京城巡防処檔案選編」中国第一歴史檔案館編『清代檔案史料叢編』第 5 輯、1980 年、161 頁)。
- (17) 陳思伯『復生録』(『近代史資料』総 41 号、1979 年 4 期、35 頁。羅爾綱・王慶成主編『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』第 4 巻、広西師範大学出版社、2004、343 頁に再収)。
- (18) 陳啓邁等奏、咸豐三年五月初九日『鎮圧』7、78 頁。
- (19) 張維城供、咸豐三年八月十六日(太平天国歴史博物館編『太平天国資料輯』『近代史資料』1963 年 1 期、14 頁、『鎮圧』9、272 頁再収)。なお 9 ケ軍の中身は前一、前二、前三、前五、後一、後三、中五、左二、右一の各軍で、うち 5 ケ軍の名前は陳思伯『復生録』の記載と一致する。
- (20) 琦善奏、咸豐三年四月十三日『鎮圧』6、383 頁。
- (21) 李嘉端奏、咸豐三年五月初十日『鎮圧』7、99 頁。
- (22) 楊文定奏、咸豐三年四月二十五日『鎮圧』6、551 頁。
- (23) 琦善奏、咸豐三年四月十六日、四月十八日『鎮圧』6、426 頁、465 頁。
- (24) 李嘉端奏、咸豐三年四月二十二日『鎮圧』6、524 頁。
- (25) 李嘉端奏、咸豐三年四月三十日『鎮圧』6、608 頁。また同日に出された李嘉端のもう一つの上奏

には「各路探報皆言、該逆雖僅三四千人、裹脅以來、不止逾萬、而鳳定一帶、土匪四起、勢甚騷動」(『鎮圧』6、609頁)とある。

- (26) 周天爵奏、咸豐三年五月初五日『鎮圧』7、47頁。
- (27) 陸應穀奏、咸豐三年五月初四日『鎮圧』7、35頁。
- (28) 陸應穀奏、咸豐三年五月十四日『鎮圧』7、146頁。また五月十七日の上奏では朱仙鎮に進出した太平軍について「約有萬餘人」と述べている(『鎮圧』7、215頁)。
- (29) 沈兆澧奏、咸豐三年五月二十日『鎮圧』7、261頁。また五月十五日の上奏では「賊匪夥黨甚多、竟有兩萬聲號」とある(『鎮圧』7、160頁)。
- (30) 林鳳祥等奏、太平天国癸好三年五月十六日(太平天国歴史博物館編『太平天国文書彙編』中華書局、1979、217頁、『鎮圧』7、518頁再収)。
- (31) 錦倫等奏統訊李開芳等人供詞摺、咸豐五年四月(「新發現の有關太平軍北伐の史料——京城巡防処檔案選編」中国第一歴史檔案館編『清代檔案史料叢編』第5輯、1980、169頁)。
- (32) 李開芳又供『清代檔案史料叢編』第5輯、167頁。
- (33) 張維城供(『鎮圧』9、272頁)。
- (34) 陳思伯『復生録』(『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』第4巻、350頁)。
- (35) 中国近代史資料叢刊『太平天国』5、神州国光社、1952、174頁。
- (36) 張大其供(『近代史資料』1963年1期、18頁)。
- (37) 光緒『六合県志』巻8、賀廷壽「兵事紀略」。また楊秀清誥諭(太平天国癸好三年四月二十三日)は林鳳祥らに、敗北して天京へ戻った後衛部隊を待たず前進するように命じている(『近代史資料』1963年1期、13頁、『鎮圧』6、589頁再収)。このほか勝保奏、咸豐三年八月初四日には捕虜の供述として「該逆北來共有三萬餘人、安徽、河南到處裹脅、不下三四萬。自汜水擊敗分股而南者、僅數千人、渡黃遭風、傷其數千人、自溫県至懷慶時、尚有三四萬人」(『鎮圧』9、153頁)とある。ここからも出発時に2万～3万人という数字が妥当であることが窺われる。
- (38) 張維城供(『鎮圧』9、272頁)。また張守常「太平天国北伐軍軍数考——太平天国北伐軍軍数人数考上篇」(『歴史研究』1991年6期、『太平軍北伐論叢』149頁所収)を参照のこと。
- (39) 王慶成「『太平軍目』和太平天国軍制」『太平天国的歴史と思想』中華書局、1985、217頁。
- (40) 張維城供および陳思伯『復生録』(『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』第4巻、344頁)。
- (41) 陳思伯『復生録』(『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』第4巻、345頁)。
- (42) 忠神天将李尚揚口述(『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』第3巻、269頁)。李尚揚は侍王李世賢の片腕として浙江湯溪県の防衛に当たった人物で、死後に宗王に封じられた。その供述には「被偽王蕭朝貴擄入賊中。蕭朝貴在湖南城外被官兵打死、逆犯就跟隨李開芳、一路到金陵。因李開芳北竄、逆犯未同去、就跟隨偽侍王李世賢」とある。
- (43) 周天爵奏、咸豐三年五月初五日『鎮圧』7、47頁。
- (44) 林鳳祥等奏、太平天国癸好三年五月十六日『鎮圧』7、518頁。
- (45) 張守常「『清史稿・洪秀全伝』一段文字の校勘」(北京太平天国史研究会編『太平天国学刊』第3輯、

中華書局、1987、301 頁、『太平軍北伐叢稿』284 頁に再収)。

- (46) 李開芳又供『清代檔案史料叢編』第五輯、167 頁。
- (47) 楊秀清誥諭、太平天国癸好三年四月二十三日『鎮圧』6、589 頁。
- (48) 京城巡防処奏審録王太供詞摺『清代檔案史料叢編』第 5 輯、179 頁。
- (49) 慧成奏、咸豐三年四月十九日『鎮圧』6、483 頁。
- (50) 袁甲三奏、咸豐三年四月二十九日『鎮圧』6、596 頁。
- (51) 周天爵奏、咸豐三年五月初五日『鎮圧』7、47 頁。また臧紆青については同治『徐州府志』巻 22 中之上、人物伝、忠節。
- (52) 恩華奏、咸豐三年五月十二日『鎮圧』7、118 頁。瑞昌奏、咸豐三年五月十八日同書 229 頁。ただしこれらの部隊は数千名の規模で、山東や清江の防備に振り向けられた(恩華奏、咸豐三年五月十六日『鎮圧』7、187 頁。琦善等奏、咸豐三年五月十八日、同書 226 頁)。
- (53) 李嘉端奏、咸豐三年四月三十日『鎮圧』6、609 頁。張亮基等奏、咸豐三年四月二十日、同書 495 頁。また河南巡撫陸應穀も直隸布政使張集馨、四川総督慧成らを派遣するように求めた(『鎮圧』7、67 頁、91 頁)。
- (54) 陸應穀奏、咸豐三年五月初八日、初十日『鎮圧』7、67 頁、91 頁。
- (55) 林鳳祥らの戦況報告によると、太平軍は歸徳城攻撃で「城内妖兵妖官盡殺、約殺三千之多、得紅粉式萬有餘斤」、陸應穀軍との戦闘では「追殺三十餘里之遙、不見妖兵勝回。滿坡死妖如薜、約殺得妖式千有餘」という戦果をあげた(『鎮圧』7、518 頁)。また龔沔『耕餘瑣聞』甲集には「聞城外死者三四千、城中官民被害者六七千。火藥兩萬餘斤皆爲賊有。此賊到中州第一次殘暴」とある(『太平軍北伐資料選編』258 頁)。
- (56) 長臻奏、咸豐三年五月十三日『鎮圧』7、130 頁。
- (57) 李德奏、咸豐三年五月十九日『鎮圧』7、245 頁。
- (58) 林鳳祥等奏、太平天国癸好三年五月十六日『鎮圧』7、518 頁。
- (59) 李德奏、咸豐三年五月十九日『鎮圧』7、245 頁。
- (60) 沈兆澧奏、咸豐三年五月十三日『鎮圧』7、132 頁。陸應穀奏、咸豐三年五月十七日、同書 215 頁。また林鳳祥らは「十五日(6 月 19 日)、四十五里至河南省城外、深溝兩重、週圍並無房屋、離黃河二十里亦無船隻。卑職斟酌、四十里至朱仙鎮、即時前往住宿、近黃河七十里、亦點兵前去取船」と述べている(『鎮圧』7、518 頁)。
- (61) 沈兆澧奏、咸豐三年五月十五日『鎮圧』7、160 頁。周天爵奏、咸豐三年五月二十八日、同書 387 頁。
- (62) 光緒『祥符県志』巻 23、雜事志、祥異は「賊攻城長技惟恃地雷、自牟工、祥工黃水兩溢、汴城外浮沙深丈餘、近郊無大村落、不能成隧道」とあり、増水のために太平軍の得意な地雷攻撃が出来なかったと述べている。また賈臻『退厓公牘文字』巻 4、「汴省解嚴諸神佑順請奏請加上封號頒發扁額撫臺」には「炎天酷熱、人馬飢疲。忽遇大雨傾注、迅雷烈風、所有火藥大半沾濕、人亦多生暴病」とある(『太平軍北伐資料選編』260 頁)。
- (63) 林鳳祥等奏、太平天国癸好三年五月十六日『鎮圧』7、518 頁。

- (64) 民国『鞏県志』巻5、大事記によると、太平軍は「兵亦頗有紀律、民有獻物者厚賜之。留數日、渡河攻懷慶」とある。また太平軍は暴行を禁止したが、偶像破壊は行ない、南大寺、石窟寺、神堤大王廟、石關が被害にあったこと、人々は太平軍を「紅巾隊」と呼んだと述べている。
- (65) 袁甲三「陳明皖省軍務情形並請派統大員摺」『袁端敏公全集』奏議、巻2（『太平軍北伐資料選編』191頁）。ここでは刑部左侍郎呂賢基も併せて批判されている。
- (66) 軍機大臣、咸豐元年五月初二日『鎮圧』1、472頁。
- (67) 軍機大臣、咸豐三年五月十四日『鎮圧』7、135頁。
- (68) 周天爵奏、咸豐三年五月二十三日『鎮圧』7、311頁。
- (69) 琦善奏、咸豐三年四月十二日、四月十三日『鎮圧』6、368頁、383頁。
- (70) 諭内閣、咸豐三年四月十六日『鎮圧』6、421頁。
- (71) 琦善奏、咸豐三年五月十八日『鎮圧』7、226頁。
- (72) 龔沅『耕餘瑣聞』甲集（『太平軍北伐資料選編』259頁）。
- (73) 張之萬奏、咸豐三年六月十七日『鎮圧』8、61頁。
- (74) 托明阿等奏、咸豐三年五月二十七日『鎮圧』7、359頁。
- (75) 陸應穀奏、咸豐三年五月初十日『鎮圧』7、91頁。
- (76) 張維城供（『鎮圧』9、272頁）。
- (77) 張之萬奏、咸豐三年六月十七日『鎮圧』8、66頁。
- (78) 李嘉端奏、咸豐三年四月初二日『鎮圧』6、260頁。
- (79) 舒興阿奏、咸豐三年六月二十四日『鎮圧』8、196頁。
- (80) 李棠階『李文清公日記』第13冊（『太平軍北伐資料選編』266頁）。
- (81) 周天爵奏、咸豐三年五月二十三日『鎮圧』7、311頁。
- (82) 陸應穀奏、咸豐三年三月初八日『宮中檔』7、463頁。
- (83) 龔沅『耕餘瑣聞』甲集（『太平軍北伐資料選編』258頁）。
- (84) 沈兆澧奏、咸豐三年五月十五日『鎮圧』7、160頁。
- (85) 張之萬奏、咸豐三年六月十七日『鎮圧』8、61頁。
- (86) 陳思伯『復生錄』（『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』第4巻、345頁）。
- (87) 軍機大臣、咸豐三年五月二十一日『鎮圧』7、267頁。
- (88) 周天爵奏、咸豐三年五月十四日『鎮圧』7、167頁。これに対して六月二十六日の上諭は「該侍郎奉命剿辦賊匪、布置經時、總未離宿州近處、以致賊匪自濫至亳、直入豫省、未聞督率兵勇與賊接仗」とあるように、周天爵が太平軍と戦わないことを叱責しながらも、結局徐州防衛に専心し、太平軍の黄河渡河を防ぐように命じた（軍機大臣、咸豐三年五月二十日『鎮圧』7、253頁）。
- (89) 敗北後の陸應穀は開封の防衛を重視し、黄河北岸へ増援を送る余裕はないと報じていたが、7月9日に太平軍の温県占領と懷慶接近を知り、一度は自ら懷慶へ向かうと報じた。だが間もなく黄河渡河に失敗した太平軍が新鄭県へ進出したと知り、懷慶救援を托明阿に任せて開封へ戻ってしまった（陸應穀奏、咸豐三年六月初二日、六月初四日『鎮圧』7、423頁、496頁、497頁）。

- (90) 張之萬奏、咸豐三年六月十七日『鎮圧』8、61頁。
- (91) 訥爾經額奏、咸豐三年五月十九日『鎮圧』7、255頁。
- (92) 陸應穀奏、咸豐三年六月初二日『鎮圧』7、421頁。なお『鎮圧』はこの奏摺の期日を六月初一日としているが、ここでは『宮中檔』の日付に従う。
- (93) 王履謙奏、咸豐三年五月二十五日『鎮圧』7、338頁。
- (94) 陸應穀奏、咸豐三年五月二十六日『鎮圧』7、348頁。
- (95) 張維城供(『鎮圧』9、272頁)。陳思伯『復生録』(『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』第4巻、345頁)。賈臻「汴省解嚴諸神佑順請奏請加上封號頒發扁額稟撫台」『退厘公牘文字』巻4、同「賈臻致瑛瑛函」『瑛蘭坡藏名人尺牘墨迹』第66冊(『太平軍北伐資料選編』261頁、245頁)。
- (96) 張維城供(『鎮圧』9、272頁)。
- (97) 托明阿等奏、咸豐三年五月二十七日『鎮圧』7、359頁。
- (98) 托明阿等奏、咸豐三年六月初一日『鎮圧』7、424頁。本稿ではこの南返軍について詳述する余裕はないが、その人数については張守常「太平天国北伐軍人数考——太平天国北伐軍軍数人数考下篇」(『近代史研究』1991年1期、『太平軍北伐論叢』164頁所収)を参照のこと。
- (99) 王履謙奏、咸豐三年五月二十九日『鎮圧』7、392頁。
- (100) 李棠階は1822年の翰林で、1842年に広東学政となり、太常寺少卿に抜擢されたが、降級処分を受けて官を辞め、家で「講学」をしていた。また同治年間以後は再び起用されて礼部尚書となり、軍機大臣まで昇進したという。
- (101) 李棠階『李文清公日記』第13冊(『太平軍北伐資料選編』266～267頁)。
- (102) 張之萬奏、咸豐三年五月十九日『宮中檔』8、605頁。
- (103) 李棠階『李文清公日記』第13冊(『太平軍北伐資料選編』267～270頁)。
- (104) 太平天国歴史博物館編『天国春秋』文物出版社、2002、61頁。原件は河南獲嘉県文化館蔵。この告示は林鳳祥を「天官正丞相(実際は天官副丞相)」、李開芳を「地官副丞相(同じく地官正丞相)」、「太平天国癸好三年」を「癸丑」と書き記すなどの過ちが見られるが、2004年に筆者が太平天国歴史博物館を訪問してその史料的信憑性を確かめたところ、太平軍が出した告示の抄本に間違いのないことだった。
- (105) 李棠階『李文清公日記』第13冊(『太平軍北伐資料選編』270～271頁)。
- (106) 『太平軍攻懷慶実録』(『近代史資料』81号、1995、82～83頁)。
- (107) 例えば顧壽楨「故河南按察司使余公太守裘公懷慶城守事狀」(『孟晉齋文集』巻1、『太平軍北伐資料選編』292頁)。
- (108) 陳思伯『復生録』(『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』第4巻、346頁)。
- (109) 田桂林『粵匪犯懷実録』(『近代史資料』81号、83～86頁)。
- (110) 『太平軍攻懷慶実録』(『近代史資料』81号、86～87頁)。
- (111) 李棠階『李文清公日記』第13冊(『太平軍北伐資料選編』271頁)。
- (112) 勝保奏、咸豐三年六月三十日『鎮圧』8、286頁。

- (113) 龔沚『耕余瑣聞』癸集(『太平軍北伐資料選編』284～285頁)。陸應穀の上奏(咸豐三年六月二十九日)によると、1回目の地雷攻撃で知縣裴寶鏞は城壁から落下して太平軍に捕らえられそうになったが、民人の呂新によって救出された(『鎮圧』8、253頁)。また3回目の地雷攻撃ではまず西門が爆破され、官兵は逃亡してしまったが、「衆百姓」が防衛しているところへ大雨と雹が降り、太平軍は突入のチャンスを逸した。また続いて東門が爆破されたが、守城側が隙を与えなかったという(田桂林『粵匪犯懷実録』(『近代史資料』81号、92頁)。ちなみに北伐軍の内部でも毎日礼拝が行われていた(張維城供(『鎮圧』9、272頁)。
- (114) 龔沚『耕余瑣聞』戊、甲集(『太平軍北伐資料選編』288頁)。田桂林『粵匪犯懷実録』(『近代史資料』81号、86頁)。
- (115) 賈臻「致李文園前輩太常」『退居公牘文字』卷4、李棠階『李文清公日記』第13冊(『太平軍北伐資料選編』277、271頁)。また舒興阿奏(咸豐三年八月初七日)は太平軍から「令旗」を与えられて馬の購入を手伝った張玉環や、彼と共に水北関の太平軍陣地を訪ねて米、油、酢を売った牛必奎の供述を載せている(『鎮圧』9、139頁)。
- (116) 龔沚『耕余瑣聞』癸集(『太平軍北伐資料選編』284頁)。
- (117) 訥爾經額等奏、咸豐三年六月十八日『鎮圧』8、72頁。田桂林『粵匪犯懷実録』(『近代史資料』81号、88頁)。
- (118) 訥爾經額等奏、咸豐三年六月二十一日、七月初四日『鎮圧』8、123頁、339頁。龔沚『耕余瑣聞』癸集(『太平軍北伐資料選編』285頁)。田桂林『粵匪犯懷実録』(『近代史資料』81号、93頁)。この日の清軍の敗因については、功を焦った董占元が深入りしたとか、太平軍の地雷が爆発したなどの説があり一致しない。また李德の上奏(六月二十六日)は「所惜者、二十一日大名鎮總兵董占元遇賊不多、於迎戰逼近賊壘之際、黑龍江官兵忽勒馬退回、以致自相踐踏、並被賊追殺傷亡兵丁、且有參將、千總在內。似此失機誤事、殊堪憤恨」(『鎮圧』8、220頁)と述べ、黑龍江の騎馬隊が突然軍を返したことが原因だと告発している。
- (119) 田桂林『粵匪犯懷実録』(『近代史資料』81号、91頁)。なおこの時の守城側の攻撃要請については、恩華の上奏に言及がある(咸豐三年六月二十六日『鎮圧』8、219頁)。ただし恩華らが1回目の総攻撃をかけたのは8月1日であった。
- (120) 勝保が歸德救援のため揚州を出発したのは6月18日で、7月28日に懷慶城東の申趙に到着した(『鎮圧』7、119頁、同書8、180頁)。また李德が懷慶救援に出発したのは7月18日で、27日に清化鎮へ到着している(『鎮圧』7、614頁、同書8、220頁)。なお烏勒欣泰は6月22日に澤州へ向かい、7月28日に懷慶西北30里に陣を敷いた(『鎮圧』7、190頁、同書8、180頁)。
- (121) 論内閣、咸豐三年六月初八日『鎮圧』7、534頁。
- (122) 勝保奏、咸豐三年七月初六日『鎮圧』8、382頁。
- (123) 勝保奏、咸豐三年六月三十日『鎮圧』8、286頁。
- (124) 王茂蔭奏、咸豐三年七月二十日『鎮圧』8、574頁。
- (125) 恩華奏、咸豐三年六月二十六日『鎮圧』8、218頁。また勝保も8月7日の攻撃を報じる中で、恩

- 華と連絡を取らないまま攻撃を行なったことを認めている（勝保奏、咸豐三年七月初六日『鎮圧』8、380頁）。
- (126) 訥爾經額等奏、咸豐三年七月十六日『鎮圧』8、622頁。勝保奏、咸豐三年七月二十一日、同書8、581頁。
- (127) 訥爾經額等奏、咸豐三年七月二十二日『鎮圧』8、610頁。
- (128) 訥爾經額等奏、咸豐三年七月十六日『鎮圧』8、522頁
- (129) 張之萬奏、咸豐三年七月二十一日『鎮圧』8、584頁。
- (130) 張維城供（『鎮圧』9、272頁）
- (131) 勝保奏、咸豐三年七月初九日『鎮圧』8、415頁。
- (132) 訥爾經額等奏、咸豐三年七月二十二日、七月二十七日『鎮圧』8、608頁、同書9、21頁。
- (133) 田桂林『粵匪犯懷実録』（『近代史資料』81号、98頁）。
- (134) 陳思伯『復生録』（『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』第4巻、346頁）。龔沅『耕余瑣聞』癸集（『太平軍北伐資料選編』284頁）。
- (135) 訥爾經額奏、咸豐三年八月初一日『鎮圧』9、70頁。
- (136) 咸豐帝、咸豐三年八月初四日『鎮圧』9、105頁。
- (137) 哈芬奏、咸豐三年八月初六日『鎮圧』9、122頁。
- (138) 訥爾經額奏、咸豐三年八月十四日『鎮圧』9、240頁。
- (139) 田桂林『粵匪犯懷実録』（『近代史資料』81号、99頁）。
- (140) 李棠階『李文清公日記』第13冊（『太平軍北伐資料選編』273頁）。
- (141) 賈臻「懷慶解圍除匪西竄籌防黃河上游南岸及伏牛山要隘」（『太平軍北伐資料選編』282頁）。
- (142) 田桂林『粵匪犯懷実録』（『近代史資料』81号、99頁）。
- (143) 王蘭廣『自著年譜』（『太平軍北伐資料選編』275頁）。

Some Issues on the early phases of the Taiping movement's attack on Beijing (北京)

<Summary>

Hideaki Kikuchi

The Taiping movement (太平天国 : 1850 ~ 1864) had a great impact on modern Chinese history. It had a strong influence on Sun Wen (孫文), the Nationalist Party (国民党) leader, who masterminded the attack on Beijing – Beifa (北伐). This article aims to examine the early phases of Taiping's attack on Beijing.

Taiping departed Nanjing (南京) as a twenty-thousand-strong army and advanced up north thanks to the Qing (清) government's ill-organized defense. The army crossed the river Huanghe (黄河) and attacked Huaqing (懷慶) for fifty-four days, while leaving three to four thousand soldiers at the south bank waiting for reinforcements. This operation was not successful; the exhausted Taiping army withdrew from Huaqing. In exchange of this sacrifice, however, they regained mobility and debouched to the Huabei (華北) plains near Beijing, surprising the Qing court.